

中国のほんの話(66)

富士川英郎『江戸後期の詩人たち』

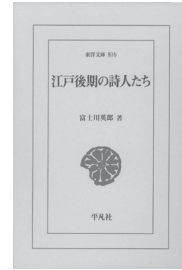
～ 江戸漢詩人は外国文学者の先輩 ～

蔭山 達弥

今は無き小沢書店のPR誌『Poetica [ポエティカ]』第3号(1992.1-2)の特集は、当時同社から著書、訳詩集を12点刊行していた富士川英郎だった。特集記事は小説家、中村眞一郎との対談で始まり、川村二郎、那珂太郎、佐伯彰一、平川祐弘、沓掛良彦ら10名の執筆者が氏へのエッセイを寄せ、終わりに富士川英郎の自筆年譜が付されている。

富士川英郎はその対談の中で、「…シュニッツラーあたりのウイーン派とか、カイザーリンクとか、トーマス・マンとかゲオルゲ、リルケ、ああいった人たちが好きですね。」と述べているように生粋のドイツ文学者である。だが、氏の数ある著書の中で、出版後高い評価を受け、広く読者を獲得したのは『江戸後期の詩人たち』(初版麦書房、のち筑摩叢書、現在平凡社東洋文庫816)である。文芸評論家の川村二郎は同誌のエッセイ『温雅な導師』の中で「富士川英郎氏の数々の著作のうちから、こちらにとって格別印象深く、感謝の思いも深い一冊を選び出せといわれたら、ほんの一瞬考えるかもしれないが、ほとんど躊躇うことなしに、『江戸後期の詩人たち』と答えるだろう。」と述べている。富士川英郎は同書筑摩叢書版あとがきの中で、「本書はこの江戸後期、つまり安永・天明の頃から幕末に至る約百年間の漢詩文の変遷のごくあらましを記述したものである。」と述べ、さらに、「これよりさき、私はかねてから森鷗外の史伝を愛読し、そのうちでも『伊沢蘭軒』に最も惹かれて、くりかえしてこれを読んできた。周知の通り、この史伝の前半部にはその主要の人物として菅茶山が姿を現しているが、私はそれを読んでいるうちに、茶山に次第に興味を覚えて、彼の生涯や詩についてももっと詳しく知りたいと思うようになった。そして茶山の詩集を手に入れて、ほぼ彼の詩風を知ることができたが、次にはそのような茶山が出現するまでの江戸時代の詩の流れや、彼以後のその移りゆき、つまり茶山の詩の前後左右を窮めようとして、いろいろな詩人のいろいろな詩集をひろく読みあさっているうちに、いつのまにか、江戸後期の詩史のだいたいの見取り図のようなものが私のなかでできあがってしまっていたのである。」と述べている。

現在入手できる東洋文庫版のオビには「日本の漢詩は江戸後期に初めて世間に幅広く普及した。大正から昭和に至り忘れられた漢詩文の豊



かな富を悠々たる筆致で現代に蘇らせた名著」と書かれている。本書の名著たる所以はどこにあるのか。先にあげた『温雅な導師』のなかで、川村二郎の次の言葉はまさに正鵠を射ている。

「『江戸後期の詩人たち』は、…むしろ、ドイツ文学に対する時と同様の、詩の言葉への愛情に満ちた理解と、穏かなゆとりある享受とが、この本でもうかがわれたのだと言ってよかった。日本の詩と西欧の詩とを、分けへだてなく平静に享受することのできる、知識と認識と感受性との熟達した共同作業、その作業の成果としての文章のいかにも自然なよどみなさ、ほかでもないこの文章の自然が、自分(川村)なりに東西の詩をひとしく愛しながら、その愛にふさわしい表現を見出しにくいと思っていた後進には、まことに啓発的に感じられた。…なまじいに西欧と日本とを比べて、誰と彼は似ている、某は日本のボードレールだ、といった具合に述べ立てる…その弊から富士川氏はさわやかにまぬかれている。そこから『江戸後期の詩人たち』の、いささかも作為性を伴わない、自然のままに温雅な説得力が、静かに輝き出ている。」

富士川英郎は明治42年(1909)2月16日、東京市本郷区西片町9番地に、父富士川游、母カズの子として生まれた。父は高名な医史学者であった。17歳の4月、旧制広島高等学校文科乙類に入学、在学中、茅野蕭々訳『リルケ詩抄』を耽読、高村光太郎『ロダン』を読んで感動、ゲオルク・ジンメルにも傾倒した。昭和7年3月(1932)、東京帝国大学独逸文学科を卒業、その後旧制第六高等学校(岡山市)教授、旧制佐賀高等学校教授を歴任、40歳の昭和24年(1949)9月に東京大学教養学部助教授となった。以後、昭和44年(1969)に定年退職するまで、東京大学教養学部で比較文学比較文化課程の講義を担当、その後は玉川大学で教鞭を執り、晩年に至るまで旺盛な著述活動を行なった。平成15年(2003)没。

かげやま たつや(教授・中国文学)